

歴史学研究 第607号(1990年6月)抜刷

エジプトにおける日本近代史研究

ラウーフ・アッバース・ハーミド

## エジプトにおける日本近代史研究

ラウーフ・アッパース・ハーミド

エジプトおよびアラブ諸国全般は、日本研究、日本史研究に関心を抱き始めたのが世界の中でも遅い国々の部類に属する。これは、アラブ世界が文化的・地政学的には地中海圏に属していることに起因する。アラブ世界にとって、影響を与え、あるいは与えられる相手、闘争や平和といった関係を取り結ぶ相手はヨーロッパであった。そして、この文化的・地政学的圏は、日本の属している極東圏とは遠く隔っていた。他方、日本の側もアラブ世界について、前世紀末までは、西洋の文献から得られた限られた知識しか持ち合わせていなかった。日本がアラブ地域に対して国益上の観点から関心を抱き始めたのは、やっと第一次世界大戦終結後のことであったが、その際にも、当初、関心の対象は、その国土にスエズ運河という——日本にとって重要な——存在を擁するエジプトに限られていた。日本が繊維製品をはじめとする自国製品の市場として、また石油の供給源としてアラブ東洋全般に関心を抱き始めるのは、1930年代以降のことであった。

しかしながら、エジプトおよびアラブ世界における日本のイメージは、1905年に日本がロシアに対して収めた勝利以来、輝かしいものであった。日本の勝利の中にアラブは、東洋の諸人民が西洋を向うに回して抱負を達成し、東洋のかつての栄光を取り戻す可能性を見出したのである。日本の勝利は当時の最も偉大なアラブ詩人の一人であったハーフィズ・イブラーヒーム (Ḥāfiẓ Ibrāhīm) に靈感を与え、彼は日本の勝利を歌い、「ロシア熊の皮を剥ぐ」ことに成功した日本人民を称える詩を書いた。同様に、エジプトの国民的指導者であったムスタファー・カーミル・パシャ (Muṣṭafā Kāmil) は、1905年に『昇る太陽 *Al-Shams al-Mushriqa*』と題する小冊子を発表した。彼はこの冊子の中で明治期における

日本の覚醒について語り、日本国民を称賛し、エジプト国民に——国土を占領しているイギリスに対して勝利を収めることができるよう——日本の経験から学ぶことを要求した。

日本のこの勝利はまた、エジプトの陸軍士官学校の教官を務めていたアフマド・ファドリー (Aḥmad Faḍlī) という一大尉をも魅了した。彼は1908年に日本に赴き、1911年頃まで東京で生活し、帰国後、『日本の進歩の秘密 *Sirr Taqaddum al-Yābān*』と題する著書を出版した\*。これは明治期の日本についてアラビア語で書かれた、初めての書物であった。また、この2年前にはアフマド・ファドリーはやはりカイロで（おそらく彼自身はまだ東京に滞在中であったが）、桜井という日本の将校の筆になる書物の翻訳を『大和魂 *Al-Nafs al-Yābāniya*』という題で出版している。この本への序文の中でアフマド・ファドリーは、著者の将校、桜井は自分の個人的友人であること、原著に寄せた序文の中で大隈伯爵（大隈重信—編集部注）が桜井を称賛していること、を述べている。

『日本の進歩の秘密』（カイロ、1911年）は152頁から成り、外国事情入門書としての性格を有しているが、同時に、著者が滞在中に日本社会から受けた諸々の印象も記されている。書物の内容からは、著者が日本語や日本の風習・伝統・生活様式に通じていたことが窺われる。これ以前に日本に関する類書が存在しなかったため、著者はまず第一章では、古代以来の日本の歴史について簡単に紹介している。第二章では日本の信仰として神道について述べ、第三章では日本の自然、住民の性質・風習について述べている。つづく第四章は「光の時代 *Ahd al-Nūr*』と題され、明治天皇とその治世に関する記述にあてられている。この章には、国会開設に関する詔書、

教育勅語、軍人勅諭の訳が収められている。最後に結語があり、この中で著者は、教育制度と国民性が日本の進歩の秘密であると述べ、日本が達成したことをエジプトも達成できるよう、エジプト国民が日本の経験を模範とすることを求めている。

しかしながら、こうした著作群は——重要ではあるが——日本の歴史・文化に対する一般的関心を反映したものではなく、特定の状況の産物であった。じきに日本は再び、アラブ世界の関心の中心から遠ざかった。次に日本に対する関心が蘇ったのは、第二次世界大戦後、特に、中東が日本の最大のエネルギー供給源となり、日本の投資がアラブ産油国の市場に向い始めた1950年代末であった。1960年代になると、日本はその急速な経済成長によって再びアラブ諸国の視線を引きつけるようになった。また、日本の側も、アラブ世界との協力関係の強化に関心を抱いた。これらすべての要因の結果として、日本の経験とその歴史的背景に対する学習意欲・関心が蘇り、1975年には日本の国際交流基金の援助を得て、カイロ大学に日本語学科が開設された。以後、カイロ大学は——エジプトにおける日本研究の歴史は既に見たようにごく新しいものであるが——アラブ世界における日本史研究の最重要拠点となっている。

さて、エジプト人研究者による日本近代史研究の最初の試みは、エジプト、日本両国における近代への移行過程、近代化過程の比較研究として始まった。この試みを行なったのは、日本を訪問し、比較研究に関心を持つ日本人研究者と協力する機会を与えられた者たちであった。この種の研究に属するものとして、ラウーフ・アッバース・ハーミド (Ra'uf 'Abbas Ḥamid) の論文「19世紀における豪農——日本とエジプトの比較研究」(*Rural Gentry in the Nineteenth Century, Japan and Egypt, A Comparative Study*, V. R. F. series, AJIKEN, Tokyo, 1974)、また、アブド・アッ・ラヒーム・アブド・アッ・ラフマーン ('Abd al-Raḥīm 'Abd al-Raḥmān) と三木亙の共同研究である「オスマン帝国支配下のエジプトと徳川時代の日本における農村——比較研究」(*Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan, A Comparative Study*, AA Ken, Tokyo Gai Dai, 1977) がある。これらの研究は、これ以

後のエジプト人研究者の日本近代史研究への関心の礎石を形成するものであった。前者は19世紀のエジプトの農村における名望家 (al-a'yān) 層の出現と成長の諸要因を江戸末期・明治初期の日本における豪農層との比較の上に考察したものであり、後者は18世紀のエジプト、日本両国における土地保有、税、耕作の制度を取り扱ったものであった。

また、ラウーフ・アッバース・ハーミドは日本近代史に対する関心を継続し、「中東における日本の利害」(『中東 *Al-Sharq al-Awsat*』誌, 1975年1月, 第2号, アイン・シャムス大学) と題する論考を発表した。この論考は1930年代以来の日本の中東に対する関心の源を分析し、1950年代以来の中東地域に対する日本の投資の増加をフォローし、日本と中東の貿易の発展を量・質・傾向の面で検討したものであった。1973年の石油ショック以降、貿易に多様化の兆が現われたこと、それまでは石油だけが日本の関心の対象だったのに対し、これ以後は中東諸国の成長に寄与することにも相対的な関心が示されるようになったことが指摘された。

このうち、同じ筆者は研究対象を明治期に絞って、『エジプト歴史学雑誌 *Al-Majalla al-Ta'rikhiya al-Misriya*』に2本の論文を発表した。第一は「近代日本の覚醒の文化的基礎——1854年～1904年」(『エジプト歴史学雑誌』, vol. 23, エジプト歴史学会, 1976年) であり、第二は「明治初期における憲法制定要求運動」(同, vol. 24, 1977年) である。

第一の論文においては、筆者はまず日本史における1854年～1904年という時期の重要性を指摘し、この時期に生じた諸潮流・諸展開のうち最も重要なものについて解説したあと、日本文化を特徴づける一般的性質を——それが日本社会の近代化に与えた影響という観点から——考察した。ここで筆者が特に強調したのは、日本が中国起源の文明の諸影響を吸収し、消化し、それを原型とは異なる、日本的性格の強い形態に演出し直すという能力を、歴史を通じて示しているということであった。この特性のおかげで、日本は西洋の諸影響の一部を——その枠組を日本的心性と日本的思考様式に合致する形に作り直しつつ——受容することができ、この作業の過程で、西洋から受容されるものは精選されたのである。つ

いで筆者は、日本文化を特徴づける「イエ（家、家族）」概念を取り扱う。この概念は最終的には「社会の一体性」という考え方に結晶するが、そこでは個人は集団の中に溶け去り、集団の利益のために努力し、ついには集団のために自己を犠牲にするまでに至る。筆者は、この考え方が国民経済の建設に——特に対象時期に——いかに有効な役割を果たしたかを指摘する。ついで筆者は、神道を中心とする日本の伝統的信仰と儒教教育が、極端な愛国主義的傾向（それは第二次大戦直前にピークに達することになる）を支える上で果たした役割を考察する。そして、福沢に代表される、明六社を構成した知識人らの提唱した西洋的自由主義が、日本古来の伝統を固守することを主張する人々の抵抗に遭ったことを考察し、この闘争の影響が文学、特に夏目漱石や石川啄木の作品に反映されていることを指摘した。

第二の論文では筆者は、自由民権運動を扱い、明治初期にもたらされた自由主義思想が運動に理論的枠組を与えたことを明らかにした。また、（公益の実現のために漸進的に立憲制度を設立することを約束した1875年の詔書と1881年に行われた同詔書の更新によって運動が終熄するまでの間）知識人、農村の名望家、そして不平士族が運動と自由党の原型を支える上で果たした役割を検討した。

同様にラウーフ・アッパース・ハーミドは、『明治時代の日本社会 *Al-Mujtama' al-Yabāni fi 'Asr Māiji*』（カイロ、1980年）と題する約300頁の書物を発表した。導入部では、江戸時代末期の日本に生じた変化、その結果としての封建社会の弱体化が叙述され、日本が西洋の圧力にさらされて、幾つかの港を西洋との交易のために開放することを強制されたことが述べられる。ついで、「新体制の建設」に関する第二章では、幕藩制の崩壊の問題が取り扱われ、天皇権力の回復と天皇の名による変革の導入に主要な役割を演じた諸勢力の目的・動機・運動方法が検討される。新しい行政制度・官僚制度がどのような原則に立脚していたかが考察され、諸々の社会改革、近代的軍隊の建設、対外関係の見直し、不平等条約、対外拡張の問題をめぐる政権内部の抗争、等の点が扱われる。「土地改革とその社会的結果」に関する第三章では、改革が農村の富裕層の利益に

奉仕するものであって一般の農民は無視されたこと、結果として数々の農民運動が起きたが、その指導は反動的要素の手に握られたことが指摘される。第四章では、資本の成長とそれに寄与した諸要因が検討される。近代的工業の建設に国家が果たした役割が指摘され、ついで、企業家層の成長と、彼らが工業の発展に果たした役割が検討される。章の終わりでは、明治時代の経済成長の全体像が概観される。第五章では、日本製品の市場の拡大が近隣諸国の犠牲の上に試みられ、朝鮮・中国に対して対外拡張政策がとられたことが述べられ、その結果としての中国、ロシアとの戦争の問題が扱われる。第六章では明治期の政治状況が、国会開設の前後にわたって考察される。憲法要求運動の経過と結果、日本の憲法の制定のされ方とその源、諸政党の結成とその役割が検討される。最終章では思想状況が検討され、自由主義的潮流から始まって極端な愛国主義的潮流に至るさまざまな傾向・思想、それぞれの傾向を代表する思想家が扱われ、これらの思潮と日本社会との関係が考察される。結語では、明治期に対する一般的評価が示される。そして、日本がこの時期に経験した変化はそれ以前の半世紀以上の過程に深く根ざしたものであること、日本の近代化の経験は第三世界のそれとは異なる特殊な状況のもとで生じたものであり、それゆえこの特殊な経験を第三世界がモデルとし、繰り返すことはもはや不可能であることが指摘される。

さて、1970年代初頭、経済大国としての日本がアラブ世界に見出す利害が増大するに伴って、カイロ大学政治経済学部大学院において、日本近代の政治的・経済的発展に関する修士論文作成の指導が行われるようになり、これまでに5本の論文が——未公開ではあるが——提出された。これらは1970～80年代のエジプトにおける日本研究への関心の高さを反映しており、欠点はあるものの、この分野における先駆的業績と見なし得るものである。

第一の論文は、アブド・アル・ガフファール・ラシャード（'Abd al-Ghaffār Rashād）、「日本の政治的経験における伝統と近代」（1975）である。筆者は論文の1/4近くを伝統と近代をめぐる政治学上の諸概念の理論的検討にあて、伝統と近代の関係に生じ

るさまざまな局面を分析している。ついで日本の経験の検討に移り、まず政治文化に一章をあてている。ここでは、天然資源の乏しさゆえの外界への依存、といった局地的環境から生じる諸条件が検討され、ついで明治期における近代化の経験が、それを取り巻く経済的・社会的要因と共に考察される。日本が政治制度を形成するにあたって特にプロシアのモデルに影響を受けたこと、そして第二次世界大戦後にはアメリカのモデルに影響を受けたことが指摘される。次の第二章では日本の政治文化の特徴が分析されるが、筆者の見解によればそれは、村落・家族のレベルにおける集団主義、世代間・階級間の関係のレベルにおけるヒエラルキー主義、政府の果たす中心的役割、政治的暴力の概念、に代表される。筆者によれば、日本における政治的忠誠の内容は二つの部分から成っている。一つは——侵略主義・軍事的拡大につながると同時に経済的達成にもつながった——民族的ファナティシズムであり、もう一つは集団や政党に対する個人の忠誠である。ついで第三章では、日本の政治思想上の伝統と近代の問題が扱われる。自由主義思想と社会主義思想（この2つは共に筆者によって、「西洋化派」と見なされる）、伝統を防衛し新奇なものを拒否する立場、そして西洋の科学と東洋のモラルを結合しようとする（筆者によって、「折衷派」と命名される）立場が分析され、それぞれを代表する思想家について若干の考察が加えられる。第四章では政治機構と政策決定過程の問題が扱われる。天皇、軍事機構、行政権、立法権、利益集団、政党が分析され、日本の政策決定過程が第二次大戦前後にわたって検討され、その特徴が指摘される。

第二の論文は、ハリール・ダルウィーシュ(Khalil Darwish)、「1955年～1975年の日本の政党制度」(1981)である。まず第一章では、1955年以前の日本の政党の歴史的発展が概観され、政党の結成とそれを取り巻いていた歴史的環境、各政党の特徴が、明治期まで遡って検討される。1955年以前を、筆者は3つの段階に分類しているが、それは(1)軍部による政治の支配(1932)が始まる以前の段階、(2)1932年～1945年の段階、(3)アメリカによる占領から1955年までの段階、である。ついで第二章では、日本の

政党制度を取り巻く経済的・社会的・文化的環境が扱われる。日本の経済制度の全般の特徴とその社会的結果、政党への影響が叙述され、階級構造・文化構造に生じた変化が政党に及ぼした影響が指摘される。第三章では政党制度を取り巻く政治的・法的環境が、日本における政治体制の形態、権力の組織化の方法等に関わる諸変数に基づいて分析される。日本国憲法、選挙制度、国民の政治参加の問題も扱われる。第四章では日本の政党の組織構造が分析され、構成員、財政、内部構造、分派等の点が考察される。各政党が経済成長、社会福祉、議会制民主主義、外交に関してどのような態度をとっているのかも考察される。第五章では、諸政党間の関係とそれを律する諸要因が分析され、政党制度における支配のあり方が、日本の政党制に特徴的なものとして描出される。

第三の論文は、ハーディヤ・ターヒル・アッ・シルビーニー(Hadiya Tahir al-Shirbini)、「アメリカ合衆国に対する日本の外交政策 1951年～1978年」(1984)である。まず序論では、アメリカ占領期(1945年～1952年)の日本の状況が概観される。ついで第一部では、研究対象時期の日本の対米政策を左右した諸要因が、国内的要因(自然環境、経済力、国内の政治制度、軍事力)、地域的要因(朝鮮戦争・インドシナ戦争を通じてのアメリカのアジアにおけるプレゼンスの増大、ニクソン・ドクトリン、米中関係、東アジア・東南アジアをめぐる米ソの競合、中国の核保有、アジアの大国としての日本の台頭)、そして国際的要因(第二次世界大戦後の段階における諸要素、国際的緊張緩和段階における諸要素)に分けて考察される。第二部では、対象時期における日本の対米外交の諸位相が検討される。日米同盟が相互安全保障の観点から考察され、アメリカの対ベトナム政策に対する日本の立場、中国・中東に対する日本の立場の問題が取り扱われる。また、日本におけるアメリカの軍事的プレゼンスの内容、自衛隊の創設、日本の軍事力に対するカーターの政策、そして日本の軍備拡張に対する日本国内の政治諸勢力および地域内の諸勢力(東南アジア諸国、中国、ソ連)の態度も検討される。最終部では、日本の対米経済政策が、それに対するECの反応、エネルギー

問題、新国際経済秩序との関係等から分析される。

第四の論文は、ライラー・ルトフィー・イスカンドル (Lailā Luṭfī Iskandar)、「日本と中国の成長の経験——後進性の問題解決への適用の可能性をめぐって」(1985)である。この研究は日中両国の成長の特徴を分析し、第三世界の国々がそれぞれから学ぶ可能性を模索したものであるが、ここでは日本の経験を扱った部分(三章から成る)を見ておくことにしよう。第一章では明治以来の日本の成長の一般的パターンが語られ、明治末期から第二次世界大戦開始期までの日本の成長の最も重要な諸特徴が指摘される。第二章では農業成長が、農業が日本の成長の原動力であり財源であるという観点から考察される。第三章では工業成長のパターンが、日本の工業部門を特徴づける二重構造の問題、工業部門の成長に政府が果たした役割、労働体系、賃金体系等の点から考察される。

第五の論文は、ムハンマド・ヌーマーン・ジャラル (Muḥammad Nu'mān Jalāl)、「1949年～1972年の日中関係」(1986)である。第一章では日中関係の歴史的背景が、第一次日中戦争(1894年～1895年)から中国における共産主義体制の成立までにわたって考察される。第二章は、共産主義体制成立後の中国にとっての国家安全の問題と日本との関係を扱い、日本におけるアメリカの存在が日本の対中国政策に与えた影響、日本の政治制度の構造が対中国政策に与えた影響、日本の政治諸勢力の中国に対する態度・関係、日本の政策に対する中国の(中ソ同盟に代表される)反応、日本の政策に対する中国側からの働きかけの手法、等の点が検討される。第三章では、対象時期における日中関係の発展が検討され、両国間の非公式関係の進展、アジアの政治的諸展開が両国関係に及ぼした影響(朝鮮戦争の終結と共産主義諸国との貿易規制の緩和、中ソ対立、1955年4月のバンドン会議への中国の参加)が考察される。そして、日中関係が冷戦から脱して平穏が戻り、非公式交流が活発化したが、再び関係が鈍化したこと、その原因(中国における文化大革命、中国の核実験、アジアにおける日本の活発な動き)が述べられ、ニクソン・ドクトリンとそれが日中関係に及ぼした影響が語られる。第四章では、日中間の国交正

常化の問題が扱われ、正常化に踏み切るに至った両国それぞれの動機、日本国内の諸勢力の、正常化に対する態度が分析される。最終章では日中関係の未来が検討され、国際世界の構造が両国関係に与える影響、台湾問題、日本の防衛政策の及ぼす影響等が検討される。最後に、両国間に結ばれた平和友好条約とその結果が分析される。

このほか、現在の日本の動向をフォローするという観点から、「アル・アフラーム政治・戦略研究センター」が、「日本——その現実と将来」という研究プロジェクトを組んでいる。7人の研究者が従事しているこのプロジェクトがこれまでに扱って来たテーマは、日本政治の展開の歴史的背景(明治期から第二次大戦後のアメリカ占領期に至るまで)、アジア・第三世界に対する日本の経済・投資活動、日本の軍備増強が(日米間の特殊な関係のゆえに)アジアの諸勢力間のバランスに及ぼしている影響、等であり、この他に、日米関係、日欧関係、中東問題に対する日本の態度等のテーマも研究されている。また、同センターでは、将来の世界政治の中に日本が果たす役割について、2000年までを視野に入れて検討するシンポジウムも開かれた。同センターの発行している季刊の学術雑誌『国際政治 *Al-Siyāsa al-Dawliya*』の1987年4月号は「日本——その現実と将来」と題する特集号となっており、このプロジェクトの成果が発表されている。

\* \* \*

以上が、エジプトにおける日本近現代史研究の状況に関する概観である。これは同時に——エジプトがアラブ世界の文化の領域において指導的役割を果たしていることから——アラブ世界全体における日本研究の状況を反映しているとも言える。既に見たように、これらの研究が始まったのは1970年代後半という遅い時期であり、研究の動機を形成したのは、日本が国際政治に果たす役割が増大し、アラブ諸国の経済にも(特に石油、貿易の分野で)大きな影響を及ぼすようになった結果、エジプト人、そしてアラブ全般が、日本の経験のルーツを知るためにその近代史を学ぶ必要を感じ始めたという事情であった。それゆえ、これらの研究はサーヴェイとしての性格が濃厚であり、特定の点について考察を

深めるというよりは、広汎な一般的テーマを扱うことが多かった。おそらく、その理由は、これらの研究者が日本語を知らなかったこと、そのため日本語による原史料が日本人自身の筆になる近代史・文化関係の著作を利用することができず、欧語に翻訳された史料や欧語で書かれた研究書を用いるしかなかったことにも求められよう。エジプト人研究者は欧米の日本研究者の著作に大半の場合依拠することを余儀なくされ、結果として、日本の近現代史を欧米人の目で観、欧米人のようにとらえるようになったが、(これは、戦間期に日本で最初にアラブ研究が始まった時、日本人研究者がアラブの歴史や文化をヨーロッパのオリエンタリストの目で観たのと全く同じ状況である)、研究がスタートラインに立ったばかりの現在ではしかたのないことで、日本語による文献を利用することのできる新しい世代の研究者が育つのを待つしかないと言えよう。

エジプトではこのような新世代の日本研究者、日本史・文化研究者の育成は着実に進んでおり、1975年には前述のようにカイロ大学に日本語・日本文化学科が開設された。これまでに同学科の卒業生のうち約8人が日本に研究のために派遣されており、うち半数は日本の歴史や文化に関わるテーマを選んでいる。これらの研究者がエジプト、アラブ世界における日本研究に転機をもたらすであろうことは(彼らは日本の大学に、日本語で学位論文を提出している)明らかである。

最後に考慮に入れておかねばならないのは、日本研究への関心は、アラブ世界が日本自体に寄せる関心と密接に結びついているということである。そして、日本に対するこの関心を支えているのは、日本がアラブ世界に有する利害の大きさ、日本がアラブ世界で果たすことのできる経済的・政治的役割の重要性であり、その結果としてアラブの知識人の間に日本とその歴史・文化に対する理解を深める必要が生まれ、学術研究、出版市場への好影響が生じ、ひいてはこれらのテーマに関心を抱く研究者がさらに増える、という仕組みになっているのである。

(訳・栗田禎子)

〔原注〕

\* アフマド・ファドリー自身に関する情報はなく、彼がどのような資格で日本に来たのかも、東京滞在中に何をしていたのかも不明である。ここでの記述は、訳書『大和魂』への序文、及び『日本の進歩の秘密』への序文に依拠している。

〔編集部注〕

ここで言及されている『大和魂』とは、軍人作家であった桜井忠温(1879~1965)が1906年に発表した『肉弾』のことであると思われる。日露戦争を扱った戦争文学である同書は、欧米諸国でも翻訳出版された。

## 文献

### I 公刊された論文・著書

(英語)

Abdel Rahim, Miki Wataru, *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan, A Comparative Study*, AA Ken, Tokyo Gaigo Dai, Tokyo, 1977.

Raouf Abbas Hamed, *Rural Gentry in the Nineteenth Century, Japan and Egypt, A Comparative Study*, VRF Series, AJIKEN, Tokyo, 1974.

(アラビア語)

Ra'uf 'Abbās Ḥāmid, "Al-Maṣāliḥ al-Yābāniya fi al-Sharq al-Awsaṭ," *Majalla al-Sharq al-Awsaṭ*, Markaz Dirāsāt al-Sharq al-Awsaṭ, Jāmi'a 'Ain Shams, No. 2, Jan. 1975 (『中東における日本の利害』、『中東』誌, 1975年1月, 第2号, アイン・シャムス大学)。

—— "Al-Uṣūl al-Thaqāfiya li-l-Nafḍa al-Yābāniya al-Hadītha 1854—1904" *Al-Majalla al-Ta'rikhiya al-Miṣriya*, Al-Jam'iya al-Miṣriya li-l-Dirāsāt al-Ta'rikhiya, vol. 23, Al-Qāhira, 1976 (『近代日本の覚醒の文化的基礎——1854年~1904年』、『エジプト歴史学雑誌』, vol. 23, エジプト歴史学会, カイロ, 1976年)。

——, "Haraka al-Muṭālaba bi-l-Dustūr fi al-Yābān fi Matla' 'Aṣr Māiji," *Al-Majalla al-Ta'rikhiya al-Miṣriya*, vol. 24, Al-Qāhira, 1977 (『明治初期における憲法制定要求運動』、『エジプト歴史学雑誌』, vol. 24, 1977年)。

——, *Al-Mujtama' al-Yābāni fi 'Aṣr Māiji 1868—1912*, Dār al-Kitāb al-Jāmi'i, Al-Qāhira, 1980 (『明治時代の日本社会: 1868~1912年』, 大学書籍出版社, カイロ, 1980年)。

——, "Al-Taṭawwur al-Siyāsī fi al-Yābān: Khalfiya Ta'rikhiya," *Al-Siyāsa al-Dawliya*, Markaz al-Dir-

(23頁へ続く)

